

俳人蕪村

正岡子規

青空文庫

緒言

芭蕉ばしやう新たに俳句界を開きしよりここに二百年、その間出づるところの俳人少からず。

あるいは芭蕉を祖述し、あるいは檀林だんりんを主張し、あるいは別に門戸を開く。しかれどもその芭蕉を尊崇するに至りては衆口一斉に出づるがごとく、檀林等流派を異にする者もお芭蕉を排斥せず、かえつて芭蕉の句を取りて自家俳句集中に加うるを見る。ここにおいてか芭蕉は無比無類の俳人として認められ、また一人のこれに匹敵する者あるを見ざるの有様なりき。芭蕉は実に敵手なきか。曰く、否。

芭蕉が創造の功は俳諧史上特筆すべきものたること論を踈またず。この点において何人なんびとかよくこれに凌駕りやうがせん。芭蕉の俳句は変化多きところにおいて、雄渾ゆうこんなるところにおいて、高雅なるところにおいて、俳句界中第一流の人たるを得。この俳句はその創業の功より得たる名誉を加えて無上の賞讃を博したれども、余より見ればその賞讃は俳句の価値に対して過分の賞讃たるを認めざるを得ず。誦するにも堪たえぬ芭蕉の俳句を註釈もつたして勿もつた体いつける俳人あれば、縁もゆかりもなき句を刻して芭蕉塚とと称となえこれを尊ぶ俗人もあり

て、芭蕉という名は徹頭徹尾尊敬の意味を表したる中に、咳唾珠がいたたまを成し句々吟誦するに堪えながら、世人はこれを知らず、宗匠はこれを尊ばず、百年間空しく瓦礫がれきとともに埋められて光彩を放つを得ざりし者を蕪村がそんとす。蕪村の俳句は芭蕉に匹敵すべく、あるいはこれに凌駕するところありて、かえつて名誉を得ざりしものは主としてその句の平民的ならざりしと、蕪村以後の俳人のことごとく無学無識なるとに因よれり。著作の価値に対する相当の報酬なきは蕪村のために悲しむべきに似たりといえども、無学無識の徒に知られざりしはむしろ蕪村の喜びしところなるべきか。その放縱ほうじょうふき不羈世俗の外に卓立せしところを見るに、蕪村また性行において尊尚すべきものあり。しかして世はこれを容いれざるなり。

蕪村の名は一般に知られざりしにあらず、されど一般に知られたるは俳人としての蕪村にあらず、画家としての蕪村なり。蕪村歿後ぼつごに出版せられたる書を見るに、蕪村画名の生前において世に伝わらざりしは俳名の高かりしがために圧せられたるならんと言えり。これによれば彼が生存せし間は俳名の画名を圧したらんかとも思われるれど、その歿後今日に至るまでは画名かえつて俳名を圧したること疑うべからざる事実なり。余らの俳句を学ぶや類題集中蕪村の句の散在せるを見てややその非凡なるを認めこれを尊敬すること深し。ある時小集の席上にて鳴雪めいせつ氏しいう、蕪村集を得来たりし者には賞を与えんと。これもと

一場の戯言なりとはいえども、この戯言はこれを欲するの念切せつなるより出でしものにして、その裏面にはあながちに戯言ならざるものありき。はたしてこの戯言は同氏をして蕪村句集を得せしめ、余らまたこれを借り覽みて大いに発明するところありたり。死馬の骨を五百金に買いたる喩たとえも思い出されておかしかりき。これ実に数年前（明治二十六年か）のことなり。しかししてこの談一たび世に伝わるや、俳人としての蕪村は多少の名誉をもつて迎えられる、余らまた蕪村派と目もくせらるるに至れり。今は俳名再び画名を圧せんとす。

かくして百年以後にはじめて名を得たる蕪村はその俳句において全く誤認せられたり。多くの人は蕪村が漢語を用うるをもつてその唯一の特色となし、しかもその唯一の特色が何故なにゆえに尊ぶべきかを知らず、いわんや漢語以外に幾多の特色あることを知る者ほとんどこれなきに至りては、彼らが蕪村を尊ぶゆえんを解するに苦しむなり。余はここにおいて卑見を述べ、蕪村が芭蕉に匹敵するところのはたしていづくにあるかを弁せんと欲す。

積極的美

美に積極的と消極的とあり。積極的美とはその意匠の壮大、雄渾、勁健けいけん、艷麗、活かっぱ

澆^つ、奇警なるものをいい、消極的美とはその意匠の古雅、幽玄、悲惨、沈靜、平易なるものをいう。概して言えば東洋の美術文学は消極的美に傾き、西洋の美術文学は積極的美に傾く。もし時代をもつて言えば国の東西を問わず、上世には消極的美多く後世には積極的美多し。(ただし壮大雄渾なるものに至りてはかえつて上世に多きを見る)されば唐時代の文学より悟入したる芭蕉は俳句の上に消極の意匠を用うること多く、従つて後世芭蕉派と称する者また多くこれに倣^{なら}う。その寂^{さび}といい、雅といい、幽玄といい、細みといい、もつて美の極となすもの、ことごとく消極的ならざるはなし。(ただし壮大雄渾の句は芭蕉これあれども後世に至りては絶えてなし)ゆえに俳句を学ぶ者消極的美を唯一の美としてこれを尚^とび、艶麗なるもの、活潑なるもの、奇警なるものを見ればすなわちもつて邪道となし卑俗となす。あたかも東洋の美術に心酔する者が西洋の美術をもつてことごとく野卑なりとして貶^{へん}するがごとし。艶麗、活潑、奇警なるものの野卑に陥りやすきはもとよりしかり。しかれども野卑に陥りやすきをもつて野卑ならざるものをも棄^すつるはその弁別の明なきがゆえなり。しかして古雅幽玄なる消極的美の弊害は一種の厭^{いや}味を生じ、今日の俗宗匠の俳句の俗にして嘔吐^{おうと}を催さしむるに至るを見るに、かの艶麗ならんとして卑俗に陥りたるものに比して毫^{ごう}も優^まるところあらざるなり。

積極的美と消極的美とを比較して優劣を判せんことは到底出来得べきにあらず。されども両者ともに美の要素なることは論を踈^またず。その分量よりして言わば消極的美は美の半面にして積極的美は美の他の半面なるべし。消極的美をもって美の全体と思惟^しせるはむしろ見聞の狭きより生ずる誤^ご謬^びならんのみ。日本の文学は源平以後地に墜^おちてまた振わず、ほとんど消滅し尽せる際に当つて芭蕉が俳句において美を發揮し、消極的の半面を開きたるは彼が非凡の才識あるを証するに足る。しかもその非凡の才識も積極的美の半面はこれを開くに及ばずして逝^ゆきぬ。けだし天は俳諧の名譽を芭蕉の専有に歸せしめずしてさらに他の偉人を待ちしにやあらん。去^き來^よ、丈^じ草^{そう}もその人にあらざりき。其角^{きかく}、嵐^{らん}雪^{せつ}もその人にあらざりき。五色^{ごしき}墨^{すみ}の徒もとよりこれを知らず。新^{しん}虚^み栗^りの時何者をか攫^{つか}まんとして得るところあらず。芭蕉死後百年に垂^{なん}んとしてはじめて蕪村は現われたり。彼は天命を負うて俳諧壇上に立てり。されども世は彼が第二の芭蕉たることを知らず。彼また名利に走らず、聞達を求めず、積極的美において自得したりといえども、ただその徒とこれを樂^{たの}しむに止^{とど}まれり。

一年四季のうち春夏は積極にして秋冬は消極なり。蕪村最も夏を好み、夏の句最も多し。その佳句もまた春夏の二季に多し。これすでに人に異なるを見る。今試みに蕪村の句をも

つて芭蕉の句と対照してもつて蕪村がいに積極的なるかを見ん。

四季のうち夏季は最も積極なり。ゆえに夏季の題目には積極的なるもの多し。牡丹ぼたんは花の最も艶麗なるものなり。芭蕉集中牡丹を詠ずるもの一、二句に過ぎず。その句また

尾張より東武に下る時

牡丹しべ深くわけ出いづる蜂はちの名残なごりかな

芭蕉

桃隣新宅自画自讚

寒からぬ露や牡丹の花の蜜みつ

同

等のごとき、前者はただ季の景物として牡丹を用い、後者は牡丹を詠じてきわめて拙つたきものなり。蕪村の牡丹を詠ずるはあながち力を用いるにあらず、しかも手に随したがつて佳句を成す。句数も二十首の多きに及ぶ。そのうち数首を挙ぐれば

牡丹散つて打重なりぬ二三片ぺん

牡丹剪きつて気の衰ゆふべへし夕ゆふべかな

地車のとゞるとひゞく牡丹かな

日光の土にも彫ほれる牡丹かな

不動画ゑがく琢磨たくまが庭の牡丹かな

ほう
方百里雨雲よせぬ牡丹かな

きんびやう
金屏のかくやくとして牡丹かな

蟻埜

ぎわうきゆう
蟻王宮朱門を開く牡丹かな

波翻舌本吐紅蓮

えんわう
閻王の口や牡丹を吐かんとす

その句またまさに牡丹と艷麗を争わんとす。

若葉もまた積極的の題目なり。芭蕉のこれを詠ずるもの一、二句にして

招提寺

若葉して御目の雫ぬぐはゞや 芭蕉

日光

あらたふと青葉若葉の日の光 同

のごとき、皆季の景物として応用したるに過ぎず。蕪村には直ちに若葉を詠じたるもの十
余句あり。皆若葉の趣味を發揮せり。例、

山にそふて小舟漕ぎ行く若葉かな

蚊帳かやを出て奈良を立ち行く若葉かな

不尽ふじ一つ埋み残して若葉かな

窓の灯ひこすゑの梢すゑに上る若葉かな

絶頂の城たのもしき若葉かな

蛇だを截きつて渡る谷間の若葉かな

をちこちに滝の音聞く若葉かな

雲くもの峰みねの句を比較せんに

ひらくとあぐる扇や雲の峰 芭蕉

雲の峰いくつ崩くづれて月の山 同

游力亭

湖や暑さを惜をしむ雲の峰 同

月山がつさんの句やや力強けれど、なお蕪村のに比すべくもあらず。蕪村の句多からずといえ

ども、

楊州の津も見えそめて雲の峰

雲の峰したく四沢の水の涵かれてより

旅意

二十日路の背中に立つや雲の峰

のごとき皆十分の力あるを覚ゆ。五月雨は芭蕉にも

五月雨の雲吹き落せ大井川 芭蕉

五月雨をあつめて早し最上川 同

のごとき雄壮なるものあり。蕪村の句またこれに劣らず。

五月雨の大井越えたるかしこさよ

五月雨や大河を前に家二軒

五月雨の堀たのもしき砦かな

夕立の句は芭蕉になし。蕪村にも二、三句あるのみなれども、雄壮当るべからざるの勢
いあり。

夕立や門脇殿の人だまり

夕立や草葉をつかむむら雀

双林寺独吟千句

夕立や筆も乾かず一千言

時鳥ほとしぎすの句は芭蕉に多かれど、雄壯なるは

時鳥声横よこたふや水の上 芭蕉

の一句あるのみ。蕪村の句のうちには

時鳥ひつぎ柩をつかむ雲間より

時鳥平安城をすぢかひに

鞆さやばしる友切丸ともぎりまるや時鳥

など極端にもものしたるものあり。

桜の句は蕪村よりも芭蕉に多し。しかも桜のうつくしき趣を詠よみ出でたるは

四方しほうより花吹き入れて鳩にはの海 芭蕉

木このもとに汁なますも桜かな 同

しばらくは花の上なる月夜かな 同

奈良七重七堂ななへしちだうがらん伽藍八重桜 同

のごとくに過ぎず。蕪村に至りては

阿古あこくそ久曾のさしぬき振ふ落花かな

花に舞はで帰るさ憎しらびやうしし白拍子

花の幕兼好けんかうを覗く女のぞあり

のごとき妖艶ようえんを極めたるものあり。そのほか春月、春水、暮春などいえる春の題を艶な

る方に詠み出でたるは蕪村なり。例えたとば

伽羅きやらくさき人の仮寝や朧おぼろづき月

女をんな俱して内裏をんな拜まん朧月

葉盗む女やはある朧月

河内路かはちちや東風こち吹き送る巫みこが袖そで

片町にさらさ染そむるや春の風

春水や四条五条の橋の下

梅散るや螺鈿らでんこぼるゝ卓の上

玉ぎよくじん人の座右つばきに開く椿つばきかな

梨なしの花月ふみに書読む女あり

閉帳の錦垂れたり春の夕

折釘をれくぎに烏帽子ゑぼし掛けたり春の宿

ある人に句を乞はれて

返歌なき青女房よ春の暮

琴心挑美人

妹が垣根三味線草の花咲きぬ

いずれの題目といえども芭蕉または芭蕉派の俳句に比して蕪村の積極的なることは蕪村集を繙く者誰かこれを知らざらん。一々ここに贅せず。

客観的美

積極的美と消極的美と相對するがごとく、客観的美と主観的美ともまた相對して美の要素をなす。これを文学史の上に照すに、上世には主観的美を發揮したる文学多く、後世に下るに従い一時代は一時代より客観的美に入ること深きを見る。古人が客観に動かされたる自己の感情を直叙するは、自己を慰むるために、はた当時の文学に幼稚なる世人をして知らしむるために必要なりしならん。これ主観的美の行われたるゆえんなり。かつその客観を写すところきわめて麤鹵にして精細ならず。例えば絵画の輪郭ばかりを描きて全部は観る者の想像に任すがごとし。全体を現わさんとして一部を描くは作者の主観に出づ。

一部を描いて全体を想像せしむるは観る者の主観に訴うるなり。後世の文学も客観に動かされたる自己の感情を写すところにおいて毫も上世に異ならずといえども、結果たる感情を直叙せずして原因たる客観の事物をのみ描写し、観る者をしてこれによりて感情を動かさしむること、あたかも実際の客観が人を動かすがごとくならしむ。これ後世の文学が面目を新たにしたるゆえんなり。要するに主観的美は客観を描き尽さずして観る者の想像に任ずるにあり。

客観的、主観的両者いづれが美なるかは到底判し得べきにあらず。積極的、消極的両美の並立すべきがごとく、これもまた並立して各自の長所を現わすを要す。主観を叙して可なるものあり、叙して不可なるものあり。客観を写して可なるものあり、写して不可なるものあり。可なるものはこれを現わし不可なるものはこれを現わさず。しかして後に両者おのおの見るべし。

芭蕉の俳句は古来の和歌に比して客観的美を現わすこと多し。しかもなお蕪村の客観的なるには及ばず。極度の客観的美は絵画と同じ。蕪村の句は直ちにもつて絵画となし得べきもの少からず。芭蕉集中全く客観的なるものを挙げれば四、五十句に過ぎざるべく、中につきて絵画となし得べきものを拵えらみなば

鶯うぐいすや柳やなぎのうしろ藪やぶの前 芭蕉

梅が香かほにのつと日の出る山路やまぢかな 同

古寺こじの桃ももに米踏こめふむ男おとこかな 同

時鳥ときどり大竹藪おほたけを漏こぼる月夜つきよ 同

さゝれ蟹かに足あしはひ上ある清水しみずかな 同

荒海あらいや佐渡さどに横よこふ天あまの川がは 同

猪いのししも共ともに吹ふかるゝ野分のわかかな 同

鞍くらつぽ壺ひしに小坊せうぼう主乗ぬりるや大根だいこん引ひ 同

塩鯛しほだいの歯茎はなも寒うをし魚うをの店たな 同

等二十句を出でざらん。宇陀うたの法師ほふしに芭蕉やぶの説せつなりとて掲かげたるを見るに

春風はるかぜや麦あわの中なか行く水みづの音ね 木導きだう

師説しせつに云いう、景氣けいきの句世間せけん容易りやういにするもつてのほかのことなり。大事だいじの物ものなり。連歌れんかに景曲けいきくと云いいにしえの宗匠そうじやう深くつつしみ一代一兩句いちらうくには過ぎず。景氣けいきの句初心こしんまねよきゆえ深くいましめり。俳諧はいかいは連歌れんかほどはいわず。総別そうべつ景氣けいきの句は皆みなふるし。一句いちくの曲まがなくては成りなりがたきゆえつよくいましめおきたるなり。木導きだうが春風はるかぜ景曲けいきく第一だいいちの句くなり。後

代手本たるべしとて褒美ほうびに「かげろふいさむ花の糸口」という脇わきして送られたり。平句
 同前なり。歌に景曲は見様けんよう体に属すと定家卿もの給うなり。寂じやくれん蓮れんの急雨定さだより頼卿
 の宇治の網代木あじろぎこれ見様体の歌なり。

とあり。景気といい景曲といい見様体という、皆わが謂いうところの客観的なり。もつて芭蕉が客観的叙述を難かたしとしたること見るべし。木導の句悪句にはあらねどこの一句を第一とする芭蕉の見識はきわめて低くきわめて幼し。芭蕉の門弟は芭蕉よりも客観的の句を作る者多しといえども、皆客観を写すこと不完全なれば直ちにこれを画とせんにはなお足らざるものあり。

蕪村の句の絵画的なるものは枚挙すべきにあらねど、十余句を挙ぐれば

木瓜ぼけの陰に顔たくひすむ雉きぎすかな

釣鐘にとまりて眠る胡蝶こてふかな

やぶ入いりや鉄漿かねもらひ来る傘かさの下

小原女をほらめの五人揃あはせふて拾あはせかな

照射ともししてさゝやく近江八幡あふみやかな

葉ほぐしうらく火串ほぐしに白き花見ゆる

卓上の鮓すしに眼寒し観魚亭

夕風や水青鷺あをさぎの脛はぎを打つ

四五人に月落ちかゝる踊をどりかな

日は斜関屋ななめの檜やりに蜻蛉とんぼかな

柳散り清水か涸れ石ところ／＼

かひがねや穂蓼ほたての上を塩車

鍋提さげて淀よどの小橋を雪の人

てらくくと石に日の照る枯野かれのかな

むさゝびの小鳥喰はみ居をる枯野かな

水鳥や舟に菜を洗ふ女あり

のごとし。一事一物を画き添えざるも絵となるべき点において、蕪村の句は蕪村以前の句よりもさらに客観的なり。

人事的美

天然は簡單なり。人事は複雑なり。天然は沈黙し人事は活動す。簡單なるものにつきて美を求むるは易く、複雑なるものは難し。沈黙せるものを写すは易く、活動せるものは難し。人間の思想、感情の単一なる古代にありて比較的によく天然を写し得たるは易きより入りたる者なるべし。俳句の初めより天然美を發揮したるも偶然にあらず。しかれども複雑なるものも活動せるものも少しくこれを研究せんか、これを描くことあながち難きにあらず。ただ俳句十七字の小天地に今までは辛うじて一山一水一草一木を写し出だししものを、同じ区劃のうちに變化極まりなく活動止まざる人世の一部分なりとも縮写せんとするは難中の難に属す。俳句に人事的美を詠じたるもの少きゆえんなり。芭蕉、去來はむしろ天然に重きを置き、其角、嵐雪は人事を写さんとして端なく佶屈聲牙に陥り、あるいは人をしてこれを解するに苦しましむるに至る。かくのごとく人は皆これを難しとするところに向つて、ひとり蕪村は何の苦もなく進み思うままに濶歩横行せり。今人はこれを見てかえつてその容易なるを認めしならん。しかも蕪村以後においてすらこれを学びし者を見ず。

芭蕉の句は人事を詠みたるもの多かれど、皆自己の境涯を写したるに止まり

鞍壺くらつぼに小坊主だいこひきのるや大根引

のごとく自己以外にありて半ば人事美を加えたるすらきわめて少し。

蕪村の句は

行く春や選者を恨む歌の主

命婦みやうぶより牡丹餅ぼたもちたばす彼岸かな

短夜みじかよや同心衆かみてうづの川手水

少年わかずの矢数問やかすひよる念者ねんしやぶり

水の粉こなやあるじかしこき後家ごけの君

虫干むしをひや甥せむひの僧訪そうぼうふ東大寺

祇園会ぎをんゑや僧そうの訪ぼうひよる梶かぢがもと

味噌汁みそじゆをくはぬ娘むすめの夏書げがきかな

鮓すしつけてやがて去いにたる魚屋うをやかな

禪ぜんに団扇だんせんさしたる亭主ていしゆかな

青梅あお梅に眉まゆあつめたる美人めいじんかな

旅芝居りよせ穂麦ほむぎがもとの鏡かがみ立て

身みに入いむや亡妻なきつまの櫛くしをねや閨ねやにふ踏ふむ

門前の老婆らうばし子こ薪しん食くる野の分ぶんかな

栗栗そなふ恵ゑしん心の作みだぼとけの弥みだ陀ぼとけ仏ふつ

書てんす記す典てん主す故てん園すに遊とつじぶ冬とうじ至しかな

沙しやみ弥み律りつ師しころりくふすまと袞ふすまかな

さゝめこと頭づきん中ちゆうにかつはをりく羽は折をりかな

孝行こうぎやうな子こ供こ等とうに蒲ふ団たん一つづゝ

のごとき数え尽さず、これらの仕し必ひつずしも力ちからを用もちいしものにあらざといえども、皆よく蕪村の特色を現あらわわして一句だに他人の作とまごうべくもあらず。天てん稟びんとは言いながら老熟の致いたすところならん。

天然美に空間的のもの多きはことに俳句においてしかり。けだし俳句は短くして時間を容いる能あたわざるなり。ゆえに人事を詠よぜんとする場合にも、なお人事の特色とすべき時間を写うつさずして空間を写すは俳句の性質のしからしむるに因よる。たまたま時間を写すものありとも、それは現在と一様なる事情の過去または未来に継続するに過ぎず。ここに例外とすべき蕪村の句二首あり。

御手おてうち討うちの夫おとこ婦めかけなりしを更ころも衣がへ

打ちはたす梵論ぼろつれだちて夏野かな

前者は過去のある人事を叙し、後者は未来のある人事を叙す。一句の主眼が一は過去の人事にあり、一は未来の人事にあるは二句同一なり、その主眼なる人事が人事中の複雑なるものなることも二句同一なり。かくのごときものは古往こおうこんらい今來他にその例を見ず。

理想的美

俳句の美あるいは分つて実験的、理想的の二種となすべし。実験的と理想的との区別は俳句の性質においてすでにしかるものあり。この種の理想は人間の到底経験すべからざること、あるいは実際あり得べからざること詠みたるものこれなり。また実験的と理想的との区別俳句の性質にあらざりて作者の境遇にあるものあり。この種の理想は今人にして古代の事物を詠み、いまだ行かざる地の景色風俗を写し、かつて見ざるある社会の情状を描き出すものこれなり。ここに理想的というは実験的に対していうものにして両者を包含す。

文学の実験に依よらざるべからざるはなお絵画の写生に依らざるべからざるがごとし。し

かれども絵画の写生にのみ依るべからざるがごとく、文学もまた実験にのみ依るべからず。写生にのみ依らんか、絵画はついに微妙の趣味を現わす能わざらん、実験にのみ依らんか、尋常一様の経歴ある作者の文学は到底陳套ちんとうを脱する能わざるべし。文学は伝記にあらず、記実にあらず、文学者の頭脳は四畳半の古机にもたれながらその理想は天地八荒のうちに遺しやうよう遙しやうようして無碍自在むげじざいに美趣を求む。羽なくして空に翔かけるべし、鰭ひれなくして海に潜むべし。音なくして音を聴きくべく、色なくして色を觀るべし。かくのごとくして得來たるもの、必ず斬ざん新奇警人を驚かすに足るものあり。俳句界においてこの人を求むるに蕪村一人あり。翻ひるがえつて芭蕉はいかんと見ればその俳句平易高雅、奇を銜げんせず、新を求めず、ことごとく自己が境涯の実歴ならざるはなし。二人は実に両極端を行きて毫も相似たるものあらず、これまた蕪村の特色として見ざるべけんや。

芭蕉も初めは

菖蒲しやうぶ生り軒いわしの鰭さわの體かうべ

のごとき理想的の句なきにあらざりしも、一たび古池の句に自家の立脚地を定めし後は、徹頭徹尾記実の一法に依りて俳句を作り。しかもその記実たる自己が見聞せるすべての事物より句を探り出いだすにあらず、記実の中にもただ自己を離れたる純客觀の事物は全

くこれを抛擲ほうてきし、ただ自己を本としてこれに関連する事物の實際を詠ずるに止まれり。今日より見ればその見識ひくの卑ひくきこと実に笑うに堪えたり。けだし芭蕉は感情的に全く理想美を解せざりしにはあらずして、理想りくつ窟くつに考えて理想は美にあらずと断定せしや必ひつせり。一世に知られずして始終逆境に立ちながら、堅固なる意思に制せられて謹嚴ひんげんに身を修めたる彼が境遇は、かりそめにも嘘うそをつかじとて文学にも理想を排したるなるべく、はた彼が愛読したりという杜詩としに記實的の作多きを見ては、俳句もかくすべきものなりとおのずから感化せられたるにもあらん。芭蕉の門人多しといえども、芭蕉のごとく記實的なるは一人もなく、また芭蕉は記實的ならずとてそれを悪く言いたる例も聞かず。芭蕉は連句において宇宙を網羅し古今を翻ほんろう弄ろうせんとしたるにも似ず、俳句にはきわめて卑ひき怯ひやうなりしなり。蕪村の理想を尚しょうぶはその句を見て知るべしといえども、彼がかつて召波しょうはに教えたりという彼の自記はよく蕪村を写し出いだせるを見る。曰く

(略) 其角を尋ね嵐雪を訪い素堂を偕い鬼貫に伴う、日々この四老に会してわずかに市城名利の域を離れ林園に遊び山水にうたげし酒を酌くみて談笑し句を得ることはもつぱら不用意を貴ぶ、かくのごとくすること日々ある日また四老に会す、幽賞雅懐はじめのごとし、眼を閉じて苦吟し句を得て眼を開く、たちまち四老の所在を失す、しらずいづれ

のところに仙化して去るや、恍として一人みずから佇む時に花香風に和し月光水に浮ぶ、
 これ子が俳諧の郷なり（略）

蕪村はいかにして理想美を探り出だすべきかを召波に示したるなり。筆にも口にも説き
 尽すべからざる理想の妙趣は、輪扁の木を断るがごとくついに他に教うべからずといえ
 ども、一棒の下に頓悟せしむるの工夫なきにしもあらず。蕪村はこの理想的のことをなお
 理想的に説明せり。かつその説明的なると文学的なるとを問わず、かくのごとき理想を述
 べたる文字に至りては上下二千載我に見ざるところなり。奇文なるかな。

蕪村の句の理想と思しきものを挙ぐれば

河童の恋する宿や夏の月

湖へ富士を戻すや五月雨

名月や兎のわたる諏訪の湖

指南車を胡地に引き去る霞かな

滝口に燈を呼ぶ声や春の雨

白梅や墨芳ばしき鴻臚館

宗鑑に葛水たまふ大臣かな

実^{さね}方^{かた}の長^{なが}櫃^{びつ}通^とる夏^{なつ}野^のかな

朝^{あさ}比^ひ奈^なが曾^そ我^がを訪^まふ日^ひや初^{はつ}鰹^{かつ}

雪^{ゆき}信^{のぶ}が蠅^{はへ}打^うち払^はふ硯^{すずり}かな

子^こ子^の水^{みづ}や長^{ちやう}沙^さの裏^{うら}長^{ちやう}屋^さ

追^{おひ}剥^{はぎ}を弟^{てい}子^しに剃^かりけり秋^{あき}の旅^{りょ}

鬼^{おに}貫^{つら}や新^{あたら}酒^{しゆ}の中^{なか}の貧^{ひん}に処^{ぢよ}す

鳥^と羽^は殿^{どの}へ五^ご六^{ろく}騎^きいそぐ野^の分^{ぶん}かな

新^{あたら}右^{みぎ}衛^ゑ門^{もん}蛇^{へび}足^{あし}をさそふ冬^{ふゆ}至^{いた}かな

寒^{せむ}月^{げつ}や衆^{しゆ}徒^との群^{ぐん}議^ぎの過^{あや}ぎて後^{のち}

高野

隠^{かく}れ住^すんで花^{はな}に真^ま田^だが謡^{うた}かな

歴史を借りて古人を十七字中に現わし得たるもの、もって彼が技倆を見るに足らん。

複雜的美

思想簡單なる時代には美術文学に對する嗜好も簡單を尙ぶは自然の趨勢なり。わが邦千余年間の和歌のいかに簡單なるかを見れば、人の思想の長く發達せざりし有様も見え透く心地す。この間に立ちて形式の簡單なる俳句はかえつて和歌よりも複雑なる意匠を現わさんととして漢語を借り来たり佶屈なる直訳的句法をさえ用いたりしも、そは一時の現象たるにとどまり、古池の句はついに俳句の本尊として崇拜せらるるに至れり。古池の句は足引しひぎの山鳥の尾のといふ歌の簡單なるに比すべくもあらざれど、なお俳句中の最も簡單なるものに属す。芭蕉はこれをもつてみずから得たりとし、終身複雑なる句を作らず。門人は必ずしも芭蕉の簡單を学ばざりしも、複雑の極点に達するにはなお遠かりき。

芭蕉は「発句は頭ほつくよりすらすらと言ひ下し来たるを上品とす」と言ひ、門人洒堂しゃどうに教えて「発句は汝がごとく物二、三取り集むる物にあらず、こがねを打ちのべたるごとくあるべし」と言えり。洒堂の句の物二、三取り集むるというは

鳩吹くや渋柿原の蕎麦畑そば

刈株や水田の上の秋の雲

の類なるべく、洒堂また常に好んでこの句法を用いたりとおぼし。しかれども洒堂のこれらの句は元禄の俳句中に一種の異彩を放つのみならず、その品格よりいふも鳩吹、刈株の

句のごときは決して芭蕉の下にあらず。芭蕉がこの特異のところを賞揚せずして、かえつてこれを排斥せんとしたるを見れば、彼はその複雑的美を解せざりし者に似たり。

芭蕉は一定の真理を言わずして時に随い人により思い思いの教訓をなすを常とす。その洒堂を誨おしえたるもこれらの佳作を斥しりぞけたるにはあらで、むしろその濫用を誡いましめたるにやあらん。許六が「発句は取合せものなり」というに對して芭蕉が「これほど仕よきことあるを人は知らずや」といえるを見ても、あながち取合せを排斥するにはあらざるべし。されどここに言える取合せとは二種の取合せをいうものにして、洒堂のごとく三種の取合せをいうにあらざるは、芭蕉の句、許六の句を見て明らかなり。芭蕉また凡兆に對して「俳諧もさすがに和歌の一体なり、一句にしおりあるように作すべし」といえるもこの間の消息を解すべきものあり。凡兆の句複雑というほどにはあらねど、また洒堂らと一般、句々材料充実して、かの虚字をもつて幹あっせん旋するする芭蕉流とはいたく異なり。芭蕉これに對して今少し和歌の臭味を加えよという、けだし芭蕉は俳句は簡單ならざるべからずと断定してみずから美の区域を狭く劃かぎりたる者なり。芭蕉すでにかくのごとし。芭蕉以後言うに足らざるなり。

蕪村は立てり。和歌のやさしみ言い古し聞き古して紛ふんぶん々たる臭気はその腐敗の極に達

せり。和歌に代りて起りたる俳句幾分の和歌臭味を加えて元禄時代に勃興したるも、支麦以後ようやく腐敗してまた拯うに道なからんとす。ここにおいて蕪村は複雑的美を捉え来たりて俳句に新生命を与えたり。彼は和歌の簡單を斥けて唐詩の複雑を借り来たり。国語の柔軟なる、冗長なるに飽きはてて簡勁なる、豪壮なる漢語もてわが不足を補いたり。先に其角一派が苦辛して失敗に終りし事業は蕪村によつて容易に成就せられたり。衆人の攻撃も慮るところにあらず、美は簡單なりという古来の標準も棄てて顧みず、卓然として複雑的美を成したる蕪村の功は没すべからず。

芭蕉の句はことごとく簡單なり。強いてその複雑なるものを求めんか、

鶯や柳のうしろ藪の前

つゝし活けて其陰に干鱈さく女

隠れ家や月と菊とに田三反

等の数句に過ぎざるべし。蕪村の句の複雑なるはその全体を通じてしかり。中につきて数句を挙げれば

草霞み水に声なき日暮かな

燕啼いて夜蛇を打つ小家かな

梨の花月に書読む女あり

雨後の月誰そや夜ぶりの脛白き
鮓をおす我れ酒かもす隣あり

五月雨や水に錢踏む渡し舟

草いきれ人死をると札の立つ

秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者

鹿ながら山影門に入日かな

鳴遠く鋏すぐ水のうねりかな

柳散り清水涸れ石ところ／＼

水かれ／＼ 蓼かあらぬか蕎麦か否か

我をいとふ隣家寒夜に鍋を鳴らす

一句五字または七字のうちなお「草霞み」「雨後の月」「夜蛇を打つ」「水に錢踏む」

と曲折せしめたる妙は到底「頭よりすらすらと言い下し来たる」者の解し得ざるところ、しかも洒堂、凡兆らもまた夢寐にだも見ざりしところなり。客観的の句は複雑なりやすし。

主観的の句の複雑なる

うき我きぬたに砧打きぬたて今は又やみね

のごとくに至りては蕪村集中また他にあらざるもの、もし芭蕉をしてこれを見せしめば惘も然うぜんじしつ自失言うぜんじしつうところを知らざるべし。

精細的美

外に広きものこれを複雑いと謂いい、内に詳つまびらかなるものこれを精細と謂いう。精細の妙は印象を明めいりよう瞭りようならしむるにあり。芭蕉の叙事形容に粗にして風韻に勝ちたるは、芭蕉の好んでなしたるところなりといえども、一は精細的美を知らざりに因よる。芭蕉集中精細なるものを求むるに

粽結片手ちまゆふにはさむ額髪

五月雨や色紙へぎたる壁の跡

のごとき比較的にしか思おもわゆるあるのみ。蕪村集中にその例を求むれば

鶯の鳴くや小ちひさき口あけて

あぢきなや椿落ち埋うづむ庭たつみ

瘦臙やせずねの毛に微風あり衣がへ

月に対す君に投網とあみの水煙

夏川をこす嬉うれしさよ手に草履ぞうり

鮎あゆくれてよらで過ぎ行く夜半よはの門かど

夕風や水青鷺あをさぎの脛はぎを打つ

点滴に打たれてこもる 蝸かたつむり 牛

蚊の声す忍にんじょう 冬の花散るたびに

青梅に眉あつめたる美人かな

牡丹散ちって打ち重りぬ二三片

唐草に牡丹めでたき蒲団かな

引きかふて耳をあはれむ頭巾づきんかな

緑みどり子の頭巾眉深まぶかきいとほしみ

真結まむすびの足袋はしたなき給仕かな

齒あらはに筆の氷を嚙む夜かな

茶の花や石をめぐりて道を取る

等いと多かり。

庭たつみに椿の落ちたるは誰も考えつくべし。埋むとは言い得ぬなり。もし埋むに力入れたらんには俗句と成り了らん^{おわ}。落ち埋むと字余りにして埋むを軽く用いたるは蕪村の力量なり。よき句にはあらねど、埋むとまで形容して俗ならしめざるところ、精細的美を解したるに因る。精細なる句の俗了しやすきは蕪村のつとに感ぜしところにやあらん、後世の俳家いたずらに精細ならんとしてますます俗に墮^おつる者、けだし精細的美を解せざるがためなり。妙人の妙はその平凡なるところ、拙^{つたな}きところにおいて見るべし。唐詩選を見て唐詩を評し、展覧会を見て画家を評するは殆^{あやう}し。蕪村の佳句ばかりを見る者は蕪村を見る者にあらざるなり。

「手に草履」ということももし拙く言いのばしなば殺風景となりなん。短くも言い得べきを「嬉しさよ」と長く言いて、長くも言い得べきを「手に草履」と短く言いしもの、良工苦心のところならんか。

「鮎^{あな}くれて」の句、かくのごとき意匠は古来なきところ、よしありたりとも「よらで過ぎ行く」とは言い得ざりしなり。常人をして言わしめば鮎^{あな}くれしを主にして言うべし。そは平凡なり。よらで過ぎ行くところ、景を写し情を写し時を写し多少の雅趣を添う。

顔しかめたりとも額に皺しわよせたりともかく印象を明瞭ならしめじ、ことは同じけれど

「眉あつめたる」の一語、美人髻ほうふつ髻として前にあり。

蒲団引きおうて夜伽よとぎの寒さを凌しのぎたる句などこそ古人も言えれ、蒲団その物を一句に形容したる、蕪村より始まる。

「頭中眉深まぶかき」ただ七字、あやせば笑う声聞ゆ。

足袋の真結まむすび、これをも俳句の材料にせんとは誰か思わん。我この句を見ること熟せり、しかもいかにしてこのことを捉え得たるかは今に怪しまざるを得ず。

「齒あらはに」齒にしみ入るつめたさ想いやるべし。

用語

蕪村の俳句における意匠の美はすでにこれを言えり。意匠の美は文学の根本にして人を感動せしむるの力また多くここにあり。しかれども用語、句法の美これに伴いとわざらんには、あたら意匠の美を活動せしめざるのみならず、かえつてその意匠に一種厭いとうべき俗気を帯びたるがごとく感ぜしむることあり。蕪村の用語と句法とはその意匠を現わすに最も適せ

るものにして、しかも自己の創体に属するもの多し。その用語の概略を言わんに

(一) 漢語 は蕪村の喜んで用いたるものにして、あるいは漢語多きをもつて蕪村の唯一の特色と誤認せらるるに至る。この一事がいかにかに人の注意を惹きしかを知るべし。蕪村が漢語を用いたるは種々の便利ありしに因るべけれど、第一に漢語が国語より簡短なりしに因らざればならず、複雑なる意匠を十七、八字の中に含めんには簡短なる漢語の必要あり。また簡短なる語を用うれば叙事形容を精細になし得べき利あり。

指南車を胡地に引き去るかすみかな

閣に坐して遠き蛙を聞く夜かな

祇や鑑や髭に落花を捻りけり

鮓桶をこれへと樹下の床几かな

三井寺や日は午に逼る若楓

柚の花や善き酒蔵す塀の内

耳目肺腸こゝに玉巻く芭蕉庵

採蓴をうたふ彦根の※かな

鬼貫や新酒の中の貧に処す

月天心貧しき町を通りけり

秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者

雁鳴くや舟に魚焼く琵琶湖上

のごときこの例なり。されども漢語の必要ありとのみにてみだりに漢語を用い、ために一句の調和を欠かば佳句とは言われじ。「胡地」の語のごときあまり耳遠く普通に用いるべきにはあらざるを、「指南車」の語上にあり、「引き去る」という漢文直訳風の語下にあるために一句の調和を得たるなり。「落花」の語は「祇や鑑や」に対して響きよく、「芭蕉庵」という語なくんば「耳目肺腸」とは置く能^{あた}わらず。「採^{さい}尊^{じゆん}」は漢語にあらざれば言うべからず、さりとしてこの語ばかりにては国語と調和せず。ゆえにことさらに「僮夫^{さうふ}」とは受けたり。

第二は国語にて言い得ざるにはあらねど、漢語を用いる方よくその意匠を現わすべき場合なり。漢語を用いて勢いを強くしたる句、

五月雨や大河を前に家二軒

夕立や筆も乾かず一^{せん}言

時鳥平安城をすぢかひに

絶頂の城たのもしき若葉かな

方百里雨雲よせぬ牡丹かな

「おおかわ」と言えば水勢ぬるく「たいか」と言えば水勢急に感ぜられ、「いただき」と言えば山嶮けわしからず、「ぜつちよう」と言えば山嶮しく感ぜらる。

漢語を用いていかめしくしたる句

蚊遣かやりしてまゐらす僧の座右かな

売卜先生木の下したやみ闇の訪はれ顔

「座右」の語は僧に対する多少の尊敬を表わし、「売卜先生ばいぼくせんせい」と例えば「卜屋算うらやさん」
 と言いしよりも鹿しかつめ爪らしく聞えてよく「訪はれ顔」に響けり。

寂として客の絶間の牡丹かな

蕭条として石に日の入る枯野かな

のごときは「しんとして」「淋しさは」など置きたると大差なけれど、なお漢語の方適切なるべし。

第三は支那の成語を用うるものにして、こは成語を用いたるがために興あるもの、または成語をそのままならでは用いるべからざるものあり。支那の人名地名を用い、支那の古

事風景等を詠ずる場合はもちろん、わが国のことをいう引合いに出されたるも少からず。

その句、

行。き。く。て。こ。ゝ。に。行。き。行。く。夏。野。か。な

朝。霧。や。杭。打。つ。音。丁。々。た。り

帛。を。裂。く。琵琶。の。流。れ。や。秋。の。声

釣。り。上。げ。し。鱸。の。巨。口。玉。や。吐。く

三。径。の。十。歩。に。尽。き。て。蓼。の。花

冬。籠。り。燈。下。に。書。す。と。書。か。れ。た。り

侘。禅。師。か。ら。鮭。に。白。頭。の。吟。を。彫。る

秋。風。の。呉。人。は。知。ら。じ。ふ。ぐ。と。汗

右三種類のほか

春。水。や。四。条。五。条。の。橋。の。下

の句は「春の水」ともあるべきを「橋の下」と同調になりて耳ざわりなれば「春水」とは置いたるならん。ただし四条五条という漢音の語なくば「春水」とは言わざりけん。

蚊。帳。釣。り。て。翠。微。つ。く。ら。ん。家。の。内

特に翠すいび微いというは翠の字を蚊帳の色にかけたるしやれなり。

薰風いっくしまやともしたてかねつ 巖いづくしま 島

「風薰る」とは俳句の普通に用いるところなれどしか言ひては「薰る」の意強くなりて句を成しがたし。ただ夏の風というくらいに意に用いるものなれば「薰風」とつづけて一種の風の名となすにしかず。けだし蕪村の炯けいがん眼がんは早くこれに注意したるものなるべし。

(二) 古語 もまた蕪村の好んで用いたるものなり。漢語は延えんぼう宝ぼう、天和の間其角一派が濫用してついにその調和を得ず、其角すらこれより後、また用いざりしもの、蕪村に至りてはじめて成功を得たり。古語は元禄時代にありて芭蕉一派が常語との調和を試み十分に成功したるもの、今は蕪村に因つてさらに一步を進められぬ。

およぐ時よるべなきさまの蛙かな

命婦より牡丹餅たばす彼岸かな

更ころもがへ衣ころもがへ母なん藤原氏なりけり

真ましまららけけののよよねね一一升升やや鮎あひののめめし

おろしおろしおくおく笈おひになになるるふふるる夏なつ野のかな

夕ゆふ顔がほやや黄わうにに咲さいたいたるるももああるるべべかりかり

夜を寒み小冠者臥したり北枕

高燈籠消えなんとするあまたゝび

渡り鳥雲のはたての錦かな

大高に君しろしめせ今年米

蕪村の用いたる古語には藤原時代のもあらん、北条足利時代のもあらん、あるいは漢書の訳読に用いられたるすなわち漢語化せられたる古語も多からん。いずれにもせよ、今まで俳句界に入らざりし古語を手に従つて拈出したるは蕪村の力なり。ただ漢語を用い、いたずらに佶屈の句を作り、もつて蕪村の真髄を得たりとなすもの、いまだ他の半面を解せざるべし。

(三) 俗語 の最俗なるものを用い初めたるもまた蕪村なり。元禄時代に雅語、俗語相半ばせし俳句も、享保以後無学無識の徒に翫弄せらるるに至つて雅語ようやく消滅し俗語ますます用いられ、意匠の野卑と相待つて純然たる俗俳句となり了れり、されどその俗語も必ずしも好んで俗語を用いしにあらで、雅語を解せざるがため知らず知らず卑近に流れたるもの、ゆえに彼らが用いる俗語は俗語中のなるべく古に近きを択みたりとおぼしく、俗中の俗なる日常の話題に至りてはもとより用いざりしのみならず、彼らなおこれを俗と

して排斥したり。檀林派の作者といえどもその意匠句法の滑稽突梯とつていなるにかかわらず、またこの俗語中の俗語を用いたるものを見ず。蕉門も檀林も其嵐派きらんはも支麦派も用いるに難かたんじたる極端の俗語を取つて平氣に俳句中に挿入したる蕪村の技ぎりよう倆は実に測るべからざるものあり。しかもその俗語の俗ならずしてかえつて活動する、腐草螢ほたると化し淤泥蓮おではちすを生ずるの趣あるを見ては誰かその奇術に驚かざらん。

出る杭くひを打たうとしたりや柳かな

酒を煮る家の女房ちよとほれた

絵団扇ゑうちばのそれも清十郎せいじふろにお夏かな

蚊帳の内に螢放してア、楽や

杜かきつばた若とびべたりと鳶とびのたれてける

薬喰隣くすりひの亭主箸持参

化さうな傘かす寺の時雨しぐれかな

後世いっさ一茶の俗語を用いたる、あるいはこれらの句より胚胎はいたいし来たれるにはあらざるか。薬喰の句は蕪村集中の最俗なるもの、一読に堪えずといえども、一茶はことにこの辺より悟入したるかの感なきにあらず。けだし一茶の作時ときに名句なきにはあらざるも、全体を通

じて言えば句法において蕪村の「酒を煮る」「絵団扇」のごときしまりなく、意匠において「杜若」「時雨」のごとき趣味を欠きたり。蕪村は漢語をも古語をも極端に用いたり。佶屈なりやすき漢語も佶屈ならしめざりき。冗漫なりやすき古語も冗漫ならしめざりき。野卑なりやすき俗語も野卑ならしめざりき。俗語を用いたる一茶のほかは漢語にも古語にも彼は匹敵者を有せざりき。用語の一点においても蕪村は俳句界独歩の人なり。

句法

句法は言語の接続をいう。俳句の句法は貞享じょうきやう、元禄に定まりて享保、宝暦を経て少しも動かず。むしろ元禄に変化したるだけの変化さえ失い、「何や」「何かな」一天張りのきわめて単調なるものとなりりて、ただ時に檀林一派及び鬼貫らの奇きを弄ろうするあるのみ。この際に当りて蕪村は句法の上に種々工夫を試み、あるいは漢詩的に、あるいは古文的に、古人のいまだかつて作らざりしものを数多あまた造り出せり。

春雨やいざよふ月の海半ななかば

春風や堤長うして家遠し

雉きじ打て帰る家路の日は高し

玉川かうやに高野の花や流れ去る

祇や鑑や髭に落花をひねりけり

桜狩美人の腹や減却す

出いっべくとして出いっずなりぬ梅の宿

菜の花や月は東に日は西に

裏門の寺に逢ほうちやく著よもぎす蓬かな

山彦の南はいづち春の暮

月とあみに対す君に投網の水煙

掛かけかう香おしや唾の娘の人となり

鮓おを圧す石上に詩を題すべく

夏山や京尽し飛とぎぶ鷺一つ

浅川の西し東す若葉かな

麓ふもとなる我蕎麦存す野分かな

蘭らん夕ゆふべ狐のくれし奇楠きやうを炷たかん

漁家寒し酒に頭の雪を焼く

頭巾二つ一つは人に参らせん

我も死して碑にほとりせん枯尾花
(蕉翁碑)

のごときは漢文より来たりし句法なり。蕪村最も多くこの種の句法をなす。

しのゝめや鶺鴒をのがれたる魚浅し

鮓桶を洗へば浅き遊魚かな

古井戸や蚊に飛ぶ魚の音暗し

魚浅し、音暗しなどいえる警語を用いたるは漢詩より得たるものならん。従来の国文い

まだこの種の工夫なし。

陽炎かげろふや名も知らぬ虫の白き飛ぶ

橋なくて日暮れんとする春の水

罌粟けしの花まがきすべくもあらぬかな

のごときは古文より来たるもの、

春の水背戸せどに田つくらんとぞ思ふ

白蓮びやくれんを剪きらんとぞ思ふ僧のさま

この「とぞ思ふ」というは和歌より取り来たりしものなり。そのほか

衣がへ野路の人はつかに白し

蚊の声す忍冬にんどうの花散るたびに

水かれ／＼た 蓼でかあらぬか蕎麦か否か

のごときあり。

元禄以来形容語はきわめて必要なるもののほか俳句には用いられざりき。いたずらに場所塞ふさいぎをなすのみにて、ありてもなくても意義に大差なしとの意なりしならん。しかれども形容語は句を活動せしめ印象を明瞭ならしむるにはこれを用いて効多し。蕪村は巧みにこれを用い、ことに中七音のうちに簡單なる形容を用うることに長じたり。

水の粉やあるじかしこき後家の君

尼寺や善き蚊帳垂るゝ宵月夜

柚ゆの花や能酒蔵さうす堀の内

手てしよく燭して善き蒲団出す夜寒かな

緑子の頭中眉深きいとほしみ

真結びの足袋はしたなき給仕かな

宿かへて火燧嬉しき在ありどころ処

後の形容詞を用いる者、多くは句勢にたるみを生じてかえって一句の病となる。蕪村の簡勁かんけいと適切とに及ばざる遠し。

蕪村の句は堅くしまりて揺かぬがその特色なり。ゆえに無形の語少く有形の語多し。簡勁の語多く冗漫の語少し。しかるに彼に一つの癖へきありてある形容詞に限り長きを厭わず、しばしばこれを句尾に置く。

つゝじ咲さいて石うつしたる嬉しさよ

更ころもがへ衣はやせ八瀬の里人ゆかしさよ

顔白き子のうれしさよ枕蚊帳まくらがや

五月雨大井越えたるかしこさよさつきあめ

夏川を越す嬉しさよ手に草履

小鳥来る音嬉しさよ板いた庇びさし

鋸のこぎりの音貧しさよ夜半の冬

のごときこれなり。普通に嬉しと思ふ時嬉しと言わば俳句は無味になり了らん、まして嬉しさよと長く言わんはなおさらのことなり。嬉しさよといわねば感情を現わす能あたわざる時

にのみ用いたる蕪村の句は、もとよりこの語を無造作に置きたるにあらず。さらに驚くべきは蕪村が一句の結尾に「に」という手爾葉てにはを用いたることなり。例えば

帰る雁田毎かりたごとの月の曇る夜に

菜の花や月は東に日は西に

春の夜や宵曙よあけぼのの其中に

畑打や鳥さへ鳴かぬ山陰に

時ほととぎす鳥 平安城をすぢかひに

蚊の声す忍冬の花散るたびに

広庭の牡丹や天の一方に

庵いほの月あるじを問へば芋掘りに

狐火や髑髏どくろに雨のたまる夜に

常人をしてこの句法に倣ならわしめば必ずや失敗に終らん、手爾葉の結尾をもつて一句を操るもの、蕪村の蕪村たるゆえんなり。

蕪村は下五文字に何ぶり、何がち、何顔、何心のごとき語を据すうることを好めり。

三椀ざんの雑煮ざんじゆかふるや長者ぶり

少年の矢数問ひよる念者ぶり

鶯のあちこちとするやこいへ小家がち

小豆あづき売る小家の梅のつぼみ苔がち

耕すや五石の粟あはのあるじ顔

燕つばくらや水田の風に吹かれ顔

川狩や楼上の人の見知り顔

売卜先生木の下闇の訪はれ顔

行く春やおもたき琵琶びはの抱き心

夕顔の花囁む猫やよそ心

寂寞せきぼくと昼間を鮓すしの馴なれ加減

またこの類の語の中七字に用いられたるもあり。後世の俗俳家何心、何ぶりなどと詠ずる者多くは卑俗厭うべし。

なれすぎた鮓すしをあるじの遺恨かな

牡丹ある寺行き過ぎし恨うらみかな

葛くずを得て清水に遠き恨かな

「恨かな」というも漢詩より来たりしものならん。

句調

蕪村以前の俳句は五七五の句切くぎれにて意味も切れたるが多し。たまたま変例と見るべきものもなお

行春ゆくや鳥啼なき魚うをの目は涙 芭蕉

松風の落葉か水の音涼し 同

松杉をほめてや風の薫る音 同

のごときものにして多くは「や」「か」等の切字きれじを含み、しからざるも七音の句必ず四三
または三四と切れたるを見る。蕪村の句には

夕風や水青鷺の脛を打つ

鮓かもを圧す我れ酒釀かもす隣あり

みやぎの 宮城野の萩更さらしな科の蕎麦にいづれ

のごとく二五と切れたるあり、

若葉して水白く麦黄ばみたり

柳散り清水か溜れ石ところ／＼

春雨や人住みて煙壁を漏る

のごとく五二または五三と切れたるもあり。これ恐らくは蕪村の創はじめたるもの、
らんごう 闌更によりて盛んに用いられたるにやあらん、
 暁ぎようたい 台、

句調は五七五調のほか時に長句をなし、時に異調をなす、六七五調は五七五調に次ぎ
 て多く用いられたり。

花を踏みし草履あさねも見えて朝寐あさねかな

妹が垣根三味線草の花咲きぬ

うづき 卯月八日死んで生るゝ子は仏

かんこどり 閑古鳥かいさゝか白き鳥飛びぬ

虫のためにそこなはれ落つ柿の花

恋さま／＼願の糸も白きより

月天心貧しき町を通りけり

はあり 羽蟻飛ぶや富士の裾野の小家より

七七五調、八七五調、九七五調の句

独鈷鎌首水かけ論の蛙かな
どくこ

売卜先生木の下闇の訪はれ顔

花散り月落ちて文こゝにあら有難や

立ち去る事一里眉毛びまうに秋の峰寒し

門前の老婆子薪たきぎ食る野分かな

夜桃林を出で、暁嵯峨さがの桜人

五八五調、五九五調、五十五調の句

およぐ時よるべなきさまの蛙かな

おもかげもかはらけく年の市

秋雨や水底の草を踏わたみ渉る

茯ぶくりやう苓たは伏かくれ松しょうろ露はあらはれぬ

侘わ禪師乾からざけ鮭あに白頭の吟を彫ある

五七六調、五八六調、六七六調、六八六調等にて終六言を

夕立や筆も乾かず一千言

ほうたんやしろかねの猫こかねの蝶

心ところてん 太さかしまに銀河三千尺

炭団たどん法師火桶の穴より覗うかがひけり

のごとく置きたるは古来例に乏しからず。終六言を三三調に用いたるは蕪村の創意にやあらん。その例、

嵯峨へ帰る人はいづこの花に暮れし

一行の雁かりや端山に月を印す

朝顔や手拭の端の藍をかこつ

水かれ／＼た 蓼たかあらぬか蕎麦か否か

柳散り清水か涸れ石ところ／＼

我をいとふ隣家寒夜に鍋をならす

霜百里舟中に我月を領す

そのほか調子のいたく異なりたるものあり。

梅遠をちこち 近南すべく北すべく

閑古鳥寺見ゆ 麦林ばくりんじ寺とやいふ

山人は人なり閑古鳥は鳥なりけり

更衣母なん藤原氏なりけり

最も奇なるは

をちこちをちこちと打つ砧きぬたかな

の句の字は十六にして調子は五七五調に吟じ得べきがごとき。

文法

漢語、俗語、雅語のことは前にも言えり。その他動詞、助動詞、形容詞にも蕪村ならで
は用いざる語あり。

鮓すしを圧す石上に詩を題すべく。

緑子の頭巾まぶか深きいとほしみ。

大矢数おほやかず弓師親子も参りたる。

時鳥歌よむ遊女聞ゆなる。

麻刈れと夕日このころ此頃斜なる。

「たり」「なり」と言わずして「たる」「なる」と言うがごとき、「べし」と言わずして「べく」と言うがごとき、「いとほし」と言わずして「いとほしみ」と言うがごとき、蕪村の故意に用いたるものとおぼし。前人の句またこの語を用いたるものなきにあらねど、そは終止言として用いたるが多きように見ゆ。蕪村のはことさらに終止言ならぬ語を用いて余意を永くしたるなるべし。

をさな子の寺なつかしむ銀杏いしてふかな

「なつかしむ」という動詞を用いたる例ありや否や知らず。あるいは思う、「なつかし」という形容詞を転じて蕪村の創造したる動詞にはあらざるか。はたしてしかりとすれば蕪村は傍若無人の振舞いをなしたる者と謂うべし。しかれども百年後の今日に至りこの語を襲用するもの続々として出でんか、蕪村の造語はついに字彙中じいの一隅を占むるの時あらんも測りがたし。英雄の事業時にかくのごときものあり。

蕪村は古文法など知らざりけん、よし知りたりともそれにかかわらざりけん、文法に違たがいたる句

更衣母なん藤原氏なりけり
のごときあり。

我宿にいかにか引くべき清水かな

のごとく「いかに」「何」等の係りを「かな」と結びたるは蕪村以外にも多し。

大文字だいもんじ近江あふみの空もたゞならね

の「ね」のごとき例も他になきにあらず、蕪村は終止言としてこれを用いたるか、あるいは前に挙げたる「たる」「なる」のごとく特に言い残したる語なるか。たとい後者なりとも文法学者をして言わしめば文法に違いたりとせん、はたして文法に違いりや、はた韻文の文法も散文のごとくならざるべからざるか、そは大いに研究を要すべき問題なり。余は文法論につきてなお幾多の疑いを存する者なれども、これらの俳句をことごとく文法に違えりとして排斥する説には反対する者なり。まして普通の場合に「ならぬ」等の結語を用いる例は万葉にもあるをや。

一一ふたもと本の梅に遅速を愛すかな

麓なる我蕎麦存す野分かな

の「愛すかな」「存す野分」の連続のごとき

夏山や京尽し飛ぶ鷺一つ

の「京尽し飛ぶ」の連続のごとき

蘭夕狐らゆふへのくれし奇楠きやうなんを炷たかん

の「蘭夕」の連続のごとき漢文より来たりしものは従来の国語になき句法を用いたり。これらはもとより故意にこの新句法を造りしもの、しかして明治の俳句界に一生面を開きしものまた多くこの辺より出づ。

材料

蕪村は狐狸怪こりをなすことを信じたるか、たとい信ぜざるもこの種の談を聞くことを好みしか、彼の自筆の草稿新花摘しんはなつみは怪談を載すること多く、かつ彼の句にも狐狸を詠じたるもの少からず。

公達きんだちに狐きつねばけたり宵の春

飯盗む狐追ふ声や麦の秋

狐火やいづこ河内かはちの麦畠

麦むぎあき秋や狐ののかぬ小百姓

秋の暮ばけ仏に化たぬきる狸かな

戸を叩く狸と秋を惜みけり

石を打狐守る夜の砧かな

蘭夕狐のくれし奇楠を炷ん

小狐の何にむせけん小萩原

小狐の隠れ顔なる野菊かな

狐火の燃えつくばかり枯尾花

草枯れて狐の飛脚通りけり

水仙に狐遊ぶや宵月夜

怪異を詠みたるもの、

化さうな傘かす寺の時雨かな

西の京にばけもの栖て久しくあれ果たる家ありけり今は其さたなくて

春雨や人住みて煙壁を洩る

狐狸にはあらで幾何か怪異の聯想を起すべき動物を詠みたるもの、

獺をその住む水も田に引く早苗かな

獺を打し翁も誘ふ田植かな

河童の恋する宿や夏の月

蝮くちばみびきの躰ねむも合歡あがねの葉陰はかげかな

麦秋あきたなや鼪啼いたなくなる長なががもと

黄昏たそがれや萩あきに鼪いたちの高台寺

むさゝびの小鳥喰はみ居をる枯野かな

このほか犬鼠などの句多し。そは怪異というにあらねどかくのごとき動物を好んで材料に用いたるもその特色の一なり。

州名国名など広き地名を多く用いたり。些ささい細なることなれど蕪村以前にはこの例少かり

しにや。

河内路かはちちや東風こち吹き送る巫女が袖

雉鳴きぎすくや草むぎさしの武蔵むさしの八平氏

三河なる八橋も近き田植かな

楊州の津も見えそめて雲の峰

夏山や通ひなれたる若狭人わかさびと

狐火やいづこ河内の麦畠

しのゝめや露を近江あふみの麻畠

初汐はつしほや朝日の中に伊豆相模いづさがみ

大文字だいもじや近江の空もたゞならね

稻妻の一網打つや伊勢の海

紀路きのぢにも下りず夜を行く雁一つ

虫鳴くや河内通ひの小提灯こちやうちん

糞、尿、屁など多く用いたるは其角なり。其角の句はやや奇を求めてことさらにもものせしがごとく思わる。蕪村はこれを巧みに用い、これら不浄の物をして殺風景ならしめざるのみならず、幾多の荒寒凄涼なる趣味を含ましむるを得たり。

大だいとこの糞ふすまひりおはす枯野こいかな

いばりせし蒲団干したり須磨の里

糞一つ鼠ねずまのこぼす衾ふすまかな

杜かきつばた若とびべたりと鳶とびのたれてける

蕪村はこれら糞尿のごとき材料を取ると同時にまた上流社会のやさしく美しき様をも巧みに詠み出でたり。

春の夜に尊き御所を守身もるかな

春惜む座主ざすの連歌に召されけり

命婦より牡丹餅ぼたもちたばす彼岸かな

滝口に灯を呼ぶ声や春の雨

よき人を宿す小家や朧月

小冠者こくわじゃ出て花見る人を咎とがめけり

短夜いとまや暇賜はる白拍子

葛水や入江の御所に詣づれば

稲葉殿の御茶たぶ夜なり時鳥

時鳥琥珀こはくの玉を鳴らし行く

狩衣かりぎぬの袖の裏這ふ螢ほたるかな

袖笠に毛虫をしのぶ古御達ふるごたち

名月や秋月どの、艤ふなよそひ

蕪村の句新奇ならざるものなければ新奇をもつて論ずれば蕪村句集全部を見るの完全なるにしかず。かつ初めより諸種の例に引きたる句多く新奇なるをもつて特にここに拳ぐるの要なしといえども、前に挙げざりし句の中に新奇なる材料を用いし句を少し記しておくべし。

野袴の法師が旅や春の風

陽炎かげろふや簀あじかに土をめつる人

奈良道や当帰たうき島ばたけの花ひとき一木

畑打や法三章の札のもと

巫女町いんろうによき衣しよけすます卯月うづきかな

更衣ゆか印かさき籠かき買かきひかきに所化しよけ二人

床涼ゆかみ笠かさ著かき連歌れんかの戻りかきかな

秋立あきつや白湯さゆ香かしかきか施薬院せやくいん

秋立あきつや何なにに驚おどくおど陰陽師おんやうし

甲賀衆かかがしゆのししのしびかのか賭かや夜半よるの秋

いでさらば投壺とうこ参まらません菊きくの花

易水に根深流るゝ寒さかな

飛驒山の質屋鎖しぬ夜半の冬

乾鮭や帯刀殿の台所

これらの材料は蕪村以前の句に少きのみならず、蕪村以後もまた用いる能わざりき。

縁語及び譬喩

蕪村が縁語その他文字上の遊戯を主としたる俳句をつくりしは怪しむべきようなれど、その句の巧妙にして斧鑿の痕を留めず、かつ和歌もしくは檀林、支麦のごとき没趣味の作をなさざるところ、またもつてその技倆を窺うに足る。縁語を用いたる句、

春雨や身にふる頭巾著たりけり

つかみ取て心の闇の螢哉

半日の閑を榎や蟬の声

出代や春さめ／＼と古葛籠

近道へ出てうれし野のつゝじかな

愚痴無智のあま酒つくる松が岡

ででむしそのつのもじ
蝸牛や其角文字のにじり書

橘のかはたれ時や ふるやかた 古館

橘のかごとがましき捨かな あはせ

一 いちはつ 八やしやが父に似てしやがの花

夏山や神の名はいさしらにぎて

藻の花やかたわれからの月もすむ

忘るなよ程は雲助時鳥

つのもじ
角文字のいざ月もよし牛祭

うそ
又嘘を月夜に釜の時雨哉 かま しぐれかな

くず
葛の葉のうらみ顔なる細雨かな

頭巾著て声こもりくの初瀬法師

晋子三十三回忌辰

すりぼん
播盆のみそみめぐりや寺の霜

または

題白川

黒谷の隣は白し蕎麦の花

のごとき固有名詞をもじりたるもあり。または

短夜や八声の鳥は八ツに啼く

茯ぶくりやう 苓りやう は伏しかくれ松しようろ 露あらはは露れぬ

思古人移竹

去来去り移竹移りぬ幾秋ぞ

のごとく文字を重ねかけたるもあり。

俳句に譬喩ひゆを用いるもの、俗人の好むところにしてその句多く理窟りくつに墮おち趣味を没す。

蕪村の句時に譬喩ひゆを用いるものありといえども、譬喩奇抜きへつにして多少の雅致そなを具そなう。また

支麦輩むびの夢寐むびにも知らざるところなり。

独鈷どくこ鎌首水かけ論の蛙かな

苗代の色紙しよしに遊ぶ蛙かな

心こころ 太たさかしまに銀河三千尺

夕顔じくろのそれは髑髏はちたきか鉢ち叩たたき

蝸牛の住はてし宿やうつせ貝

金扇に卯花画

白かねの卯花もさくや井出の里

鴛鴦をしどりや国師くわつの杳も錦革

あたまから蒲団かぶれば海鼠なまこかな

水仙もずや鴝の草莖花咲きぬ

ある隠士のもとにて

古庭に茶筌ちやせん花咲く椿かな

雁宕久しく音づれせざりければ

有と見えて扇の裏絵わぼつか覚束あつかな

波翻舌本吐紅蓮

閻王えんわうの口や牡丹を吐かんとす

蟻垤

蟻王ぎわう宮朱門を開く牡丹かな

浪花の旧国主して諸国の俳士を集めて円山に会筵しける時

うきくさ
萍を吹き集めてや 花 筵
はなむしろ

傲素堂

乾鮭や琴に斧をのうつ響あり

時代

蕪村は享保元年に生まれて天明三年に歿す。六十八の長寿を保ちしかばその間種々の経歴もありしなるべけれど、大体の上より観みれば文学美術の衰えんとする時代に生まれてその盛んならんとする時代に歿せしなり。俳句は享保に至りて芭蕉門の英俊多くは死し、支考、乙おつゆう由らが残喘ざんぜんを保ちてますます俗に墮おつるあるのみ。明和以後枯楊こようげつを生じてようやく春風に吹かれたる俳句は天明に至りてその盛を極きわむ。俳句界二百年間元禄と天明とを最盛の時期とす。元禄の盛運は芭蕉を中心として成りしもの、蕪村の天明におけるは芭蕉の元禄におけるがごとくならざりしといえども、天明の隆盛を来たせしものその力最

も多きにおる。天明の余勢は寛政、文化に及んで漸次に衰え、文政以後また痕迹こんせきを留めず。

和歌は万葉以来、新古今以来、一時代を経るまぶちごとに一段の墮落をなしたるもの、真淵出でわずかにこれを挽回したり。真淵歿せしは蕪村五十四歳の時、ほぼその時を同じゅうしたれば、和歌にして取るべくは蕪村はこれを取るに躊躇ちゆうちよせざりしならん。されど蕪村の句その影響を受けしとも見えざるは、音調に泥なすみて清新なる趣味を欠ける和歌の到底俳句を利するに足らざりしや必せり。

当時の和文なるものは多く擬古文の類にして見るべきなかりしも、擬古ということはあるいは蕪村をして古語を用い古代の有様を詠ぜしめたる原因となりしかも知らず。しかし蕪村はこの材料を古物語等より取りしと覚ゆ。

蕪村が最も多く時代の影響を受けしは漢学ことに漢詩なりき。かつ漢学は蕪村が少年の時にもしろ隆盛を極め、徂徠そらい一派は勃興したるなり。蕪村は十分に徂徠の説を利用し、もつて腐敗せる俳句に新生命を与えたるを見る。蕪村は徂徠ら修辞派の主張する、文は漢以上、詩は唐以上と言えるがごとき僻説へきせつには同意するものにあらざるべけれど、唐以上の詩をもつて粹の粹となしたること疑いあらじ。蕪村が書ける春泥集しゅんでいしゅうの序の中に曰く、

(略) 彼も知らず、我も知らず、自然に化して俗を離るるの捷徑しやうけいありや、こたえて曰く、詩を語るべし、子もとより詩を能くす、他に求むべからず、波疑はつて敢あえて問う、それ詩と俳諧といささかその致ちを異にす、さるを俳諧を捨てて詩を語れと云う迂遠うえんなるにあらずや、答えて曰く(略) 画の俗を去るだにも筆を投じて書を読ましむ、いわんや詩と俳諧と何の遠しとすることあらんや(略)

(略) 詩に李杜りとを貴ぶに論なし、なお元白げんぱくを捨てざるがごとくせよ(略)

これを読まば蕪村が漢詩の趣味を俳句に遷うつししことも、李杜を貴び元白を賤いやしみしことも明瞭ならん。漢書は蕪村の愛読せしところ、その詩を解すること深く、芭蕉がきわめておぼろに杜甫の詩想を認めしとは異なりしなるべし。

絵画の上よりも蕪村は衰運の極に生まれて盛んならんとして歿せしなり。蕪村はみずから画を造りしこと多く、南宗の画家として大雅と並称せらる。天明以後絵画にわかにはあらざるも、その影響はきわめて微弱にして、彼が俳句界における関係と同日に論ずべきにあらず。

天明は狂歌盛んに行われ、黄表紙ようやく勢いを得たる時なり。されど俳句とは直接に

関係するところなし。ただこの時代が文学美術全般の勃興を成したるは文運の隆盛を促すべき大勢に駆られたるものにして、その大勢なるものはかえつて各種の文学美術が相互に影響したる結果も多かりけん。

蕪村の交わりし俳人は太祇たいぎ、蓼太りょうた、暁台ぎょうたいらにしてそのうち暁台は蕪村に擬したりとおぼしく、蓼太は時々ひそかに蕪村調を学びしこともあるべしといえども、太祇に至りては蕪村を導きしか、蕪村に導かれしか、今これを判するを得ず。とにかくに蕪村が幾分か太祇に導かれし部分もあり得べきを信ずるなり。しかれども彼が師巴人はじんに受くるところ多からざりしは、成功の晩年にありしを見て知るべし。

履歴性行等

蕪村は摂津浪花なになわに近き毛馬塘けまづつみの片ほとりに幼時を送りしことその春風馬堤曲しゅんぷうばていきよくに見ゆ。彼は某に与うる書中にこの曲のことを記して

馬堤は毛馬塘なり、すなわち余が故園なり

といえり。やや長じて東都に遊び、巴人の門に入りて俳諧を学ぶ。夜半亭やはんでいは師の名を継

げるなり。宝曆のころなりけん、京に帰りて俳諧ようやく神に入る。蕪村もと名利を厭いとい
聞達を求めず、しかれども俳人として彼が名譽は次第に四方雅客の間に伝称せらるるに至
りたり。天明三年十二月二十四日夜歿し、亡骸なきがらは洛らくとう東金福寺に葬る。享年六十八。

蕪村は総常両毛奥羽など遊歴せしかども紀行なるものを作らず。またその地に関する俳
句も多からず。西帰の後丹後におけること三年、因つて谷口氏を改めて与謝よさとす。彼は讚州
に遊びしこともありけん、句集に見えたり。また巖いづくしま島の句あるを見るにこの地の風情ふせい
写し得て最も妙なり、空想の及ぶべきにあらず。蕪村あるいはここにも遊べるか。蕪村は
読書を好み和漢の書何くれとなくあさりしも字句の間には眼もとめず、ただ大体の趣味を
翫がんみ味して満足したりしがごとし。俳句に古語古事を用いること、蕪村集のごとく多きは他
にその例を見ず。

彼が字句にかかわらざりしは古文法を守らず、仮名遣いに注意せざりしことにもしるけ
れど、なおその他にしか思われるところ多し。一例を挙げれば彼が自筆の「新花摘に

射干さやかんして咄さやく近江やわたかな

とあり。射干しゃかんは「ひおうぎ」「からすおうぎ」などいえる花草にして、ここは「照射ともし
し」の誤なるべし。蕪村が照射と射干との区別を知らざるはずはなけれど、かかることに

無頓着の性さがとて気のつかざりしものならん。近江も大身と書くべきにや。秀吉が奥州を

「大しゆ」と書きしことさえ思い出されてなつかし、蕪村の磊落らいらくにして法度に拘泥せざりしことこの類なり。彼は俳人が家集を出版することをさえ厭えり。彼の心性高潔にして、些さの俗気なきこともつて見るべし。しかれども余は磊落高潔なる蕪村を尊敬すると同時に、小心ならざりし、あまり名誉心を抑え過ぎたる蕪村を惜しまずんばあらず。蕪村をして名を文学に揚げ誉を百代に残さんと、些の野心あらしめば、彼の事業はここに止まらざりしや必せり。彼は恐らくは一俳人に満足せざりしならん。春風馬堤曲に溢れたる詩思の富贍ふせんにして情緒の纏綿てんめんせるを見るに、十七字中に屈すべき文学者にはあらざりしなり。彼はその余勢をもつて絵事を試みしかども大成するに至らざりき。もし彼をして力を俳画に伸ばさしめば日本画の上に一生面を開き得たるべく、応挙輩をして名をほしきままにせしめざりしものを、彼はそれをも得なさざりき。余は日本の美術文学のために惜しむ。

春風馬堤曲とは俳句やら漢詩やら何やら交まぜこぜにものしたる蕪村の長篇にして、蕪村を見るにはこよなく便となるものなり。俳句以外に蕪村の文学として見るべきものもこれのみ。蕪村の熱情を現わしたるものもこれのみ。春風馬堤曲とは支那の曲名を真似たるものにて、そのかく名づけしゆえんは蕪村の書簡つまびに詳まらかなり。書簡に曰く

一春風馬堤曲馬堤は毛馬塘なりすなわち余が故園なり

余幼童之時春色清和の日には必ず友どちとこの堤上へのぼりて遊び候水には上下の船あり堤には往来の客ありその中には田舎娘の浪花に奉公してかしこく浪花の時勢粧なに倣ならい髪かたちも妓家の風情をまなび○伝しげ太夫の心中のうき名をうらやみ故郷の兄弟を恥じいやしむ者ありされどもさすが故園情こえんのじょうに堪えずたまたま親里に帰省するあだ者なるべし浪花を出てより親里までの道行にて引道具の狂言座元夜半亭と御笑い下さるべく

候実は愚老懐旧のやるかたなきよりうめき出たる実情にて候

代女述意じよにかわつてこころをのぶ

と称する春風馬堤曲十八首に曰く

やぶ入や浪花なにはを出て長柄川ながらがは

春風や堤長うして家遠し

堤下摘芳草ていかはうさうをつむ

荆けい与とき棘よく塞とみち路ふさぐ

けいきよくなぞつれなきや

裂く裙ん且を傷さ股きつつく

けいりういしてんでん

踏い石し撮を香か芹せをとる

たしやすすあじやうのいし

教われ儂にくん不を沾う裙るををしふるを

多謝水上石

一軒の茶店の柳老おいにけり

茶店の老婆子儂われを見て 慇いんぎん慇いんぎんに無恙むやうを賀し且儂われが春衣しゅんいを美ほむ
てんちうにかくあり よくかうなんのこをかいす

店中有二客

能解江南語

酒錢擲三緡

迎我讓榻去

古駅三両家猫兒妻を呼妻来らず

呼雛籬外雞

籬外草滿地

雛飛欲越籬

籬高随三四

春草路三叉中さんさに捷徑あり我を迎ふ

たんぼゝ花咲り三々五々五々は黄に三々は白し記得きとくす去年此路よりす

憐たんぼぼしる蒲公荃短して乳を浥うるほす

むかしくしきりにおもふ慈母の恩慈母の懷くわいはう抱別くわいはうに春あり

春あり成長して浪花なにはにあり 梅は白し浪花橋らうくわけう辺財主の家 春情まなび得たり浪花風なにはふ

流り

郷を辞し弟そむいに負て身さんしゆん三春 本をわすれ末を取接木の梅

故郷春深ゆきゆきし行々ゆきゆくて又行々 楊柳やうりう長堤ちやうてい道漸やうやくくれたり

矯首はじめて見る故園の家黄昏戸くわうこんに倚る白髮の人弟を抱き我まつを待春又春

君不見古人太祇が句

藪入やぶいりの寝るやひとりの親そばの側そば

なおこのほかに「澗河歌よどがわのうた 三首あり。これらは紀行的韻文とも見るべく、諸体混こんこう淆こうせる叙情詩とも見るべし。惜しいかな、蕪村はこれを一篇の長歌となして新体詩の源を開く能わざりき。俳人として第一流に位する蕪村の事業も、これを広く文学界の産物として見れば誠に規模の小なるに驚かずんばあらず。

蕪村は鬼貫句選の跋ばつにて其角、嵐雪、素堂、去来、鬼貫を五子ごしと称し、春泥集の序にて其角、嵐雪、素堂、鬼貫を四老しろうと称す。中にも蕪村は其角を推したらんと覚ゆ、「其角は俳中の李青蓮と呼ばれたるものなり」といい「読むたびにあかず覚ゆ、これ角がまされるところなり」ともいえり。しかもその欠点を挙げて「その集を閲けみするに大かた解しがたき句のみにてよきと思う句は生まれまれなり」といい「百千の句のうちにてめでたしと聞ゆるは二十句にたらず覚ゆ」と評せり。自己が唯一の俳人と崇あがめたる其角の句を評して佳什かじゅう二十首に上らずという、見るべし蕪村の眼中に古人なきを。その五子と称し四老と称す、もとより比較的の讃辞にして、芭蕉の俳句といえどもその一笑を博するに過ぎざりしならん。蕪村の眼高きことかくのごとく、手腕またこれに副そう。而して後に俳壇の革命は成れ

り。

ある人咸陽宮かんようきゆうの釘かくしなりとて持てるを蕪村は誹りそして「なかなか咸陽宮の釘隠しと云わずばめでたきものなるを無念のことにおぼゆ」といへり。蕪村の俗人ならぬこと知るべし。蕪村かつて大高源吾より伝わる高麗こうらいの茶碗というをもらいたるを、それも咸陽宮の釘隠しの類なりとて人にやりしことあり。またある時松島にて重さ十斤ばかりの埋木の板をもらいて、辛うじて白石の駅に持ち出でしが、長途の勞つかれ堪うべくもあらずと、旅舎に置きて帰りたりとぞ。これらの話を取りあつめて考うれば、蕪村の人物はおのずから描き出されて目の前に見る心地す。

蕪村とは天王寺蕪かぶらの村ということならん、和臭を帯びたる号なれども、字面じづらはさすがに雅致ありて漢語として見られぬにはあらず。俳諧には蕪村または夜半亭の雅名を用うれど、画には寅いん、春星、長庚ちようこう、三葉、宰鳥、碧雲洞へきうんどう、紫狐庵等種々の異名ありきとぞ。かの謝蕪村、謝寅、謝長庚、謝春星など言える、門弟にも高几董こうきとう、阮道立げんどうりつなどある、この一事にても彼らが徂徠派の影響を受けしこと明らかなり。二字の苗字を一字に縮めたるは言うまでもなく、その字面より見るも修辭派の臭味を帯びたり。

蕪村の絵画は余かつて見ず、ゆえにこれを品評かたすること難しといえども、その意匠につ

きては多少これを聞くを得たり。(筆力等の技術はその書及び俳画を見て想像するに足る) 蕪村は南宗より入りて南宗を脱せんと工夫せしがごとし。南宗を学びしはその雅致多きを愛せしならん。南宗を脱せんとせしは南宗の粗そしょう鬆なる筆法、狭きょうあい隘なる規模がよく自己の美想を現わすを得ざりしがためならん。彼は俳句に得たると同じ趣味を絵画に現わしたり、もとより古人の粉ふんぼん本もを摸し意匠を剽ひょうせつ竊すすることをなさざりき。あるいは田舎の風光、山村の景色等自己の実見せしもの(かつ古人の画題に入らざりしもの)を捉え来たりて、支那的空想に耽ふけりたる絵画界に一生面を開かんと企てたり。あるいは時間を写さんとし、あるいは一種の色彩を施さんとして苦心したり。(色彩に関する例を挙ぐれば春の木のの芽の色を樹によつて染め分けたるがごとき、夜間燈火の映じたる樹を写したるがごとき) 絵画における彼の眼光はきわめて高く、到底応挙、呉春らの及ぶところにあらず。しかれども蕪村は成功する能わずして歿し、かえつて豎子しゅしをして名を成さしめたり。

蕪村の画を称する者多く俳画をいう。俳画は蕪村の書きはじめしものにして一種摸すべからざるの雅致を存す。しかれども俳画は字のごときもののみ、ついに画にあらず、画を知らざるものこれをもつて画となす、取らざるなり。蕪村の字支那の書風より出でてやや和習あり。縦横自在にして法度にかかわらず、しかも俗気なきこと俳画に同じ。

蕪村の文章りゆうちよう流暢にして姿致しちあり。水の低きに就つくがごとく停滞するところなし。恨むらくは彼は一篇の文章だも純粹の美文として見るべきものを作らざりき。

蕪村の俳句は今に残りしもの一千四百余首あり、千首の俳句を残したる俳人は四、五人を出でざるべし。蕪村は比較的多作の方なり。しかれども一生に十七字千句は文学者として珍とするに足らず。放翁は古体今体を混じて千以上の詩篇を作りしにあらざや。ただ驚くべきは蕪村の作が千句ごとごとく佳句なることなり。想うに蕪村は誤字違法などは顧みざりしも、俳句を練る上においては小心翼翼として一字いやしくもせざりしがごとし、古来文学者のなすところを見るに、多くは玉石混こんこう淆こうせり、なすところ多ければ巧拙くつた兩つながらいよいよ多きを見る。杜工部集とこうぶのごときこれなり。蕪村の規模は杜甫とほのごとく大ならざりしも、とにかく千首の俳句ごとごとく巧みなるに至りては他に例を見ざるところなり。蕪村の天材は咳唾がいだごとごとく珠たまを成したるか、蕪村は一種の潔癖ありていやしくも心に満たざる句はこれを口にせざりしか、そもそも悪句は埋没して佳句のみ残りたるか。余は三者皆原因の一部を分有したりと思う。俳句における蕪村の技倆は俳句界を横絶せり、ついに芭蕉、其角の及ぶところにあらず。連句もまた蕪村は蕪村流を応用して面目を新たにせり。しかれども蕪村は芭蕉が連句に力を用いしだけ熱心には力をここに伸ばさざりき。

蕪村の俳諧を学びし者月居、月溪、召波、几圭きけい、維駒いこく等皆師の調を学びしかども、ひとりその堂に上りし者を几董きとうとす、几董は師号を継ぎ三世夜半亭をと称なう。惜しむべし、彼れ蕪村歿後数年ならずしてまた歿し、蕪村派の俳諧ここに全く絶ゆ。

明治二十九年草稿

明治三十二年訂正

青空文庫情報

底本：「日本の文学 15」中央公論社

1967（昭和42）年6月5日初版発行

1973（昭和48）年7月30日10版発行

入力：蔣龍

校正：米田

2010年12月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

俳人蕪村

正岡子規

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>